

# 2024「ことばの森教室」第1回優秀作品紹介

## <中学校1年生> 作文課題「中学生になって感じたこと」

### 1-① 「初めての中間テスト」

「あれ、テスト対策って、こんなに大変だったっけ？」中学校に入って、初めての中間テストがあった。2週間前からテスト対策が始まり、自分で計画を立てて勉強を進めていった。

小学生の時は、単元が一つ終わるごとにテストがあり、特にテスト対策をしたことがなかった。中学生になると、単元ごとではなく2ヶ月に1回のペースでテストがあり、私は「この短い期間で、5教科の復習ができるのかな。」ととても心配だった。テスト期間中に、遊びたくなったり出掛けたくなったりもしたが、テストで目標の点数を取りたかったので、さぼりたい誘惑に負けずにほぼ計画通りに学習を進めることが出来た。両親にも「良くやっているね。テストできっと良い結果が出るよ。」と励まされた。

テスト当日、今までの成果が発揮できるかドキドキしながらテストに挑んだ。自分では手応えを感じていた。テストが返ってきて、ほとんどの教科が目標点以上だったが、想像していたよりも点数が低かった。私は悔しかった。あれだけ努力をしたのに間違いがたくさんあり、次はもっと勉強の仕方を工夫して、次に生かせるよう頑張りたい。

### 1-② 「なりたい自分になるために」

「ああ疲れた。眠い。」中学校に入学してから、慣れない生活のためか、学校から帰ってくるとすぐに寝転んでしまっていた。気が付くと、いつの間にか寝入ってしまい、あわてて夕食にお風呂、そしてやっと宿題にたどり着く。時計を見ると、だいぶ遅い時間になっている。でも、また眠い目をこすりながら、やっと宿題が終わり布団に入る。しばらくこのような生活が続き、何だかうんざりしてきた。ただ時間に流され、宿題もやらされている感覚になってきた。「小学生に戻りたいなあ」思わず声にも出してしまった。

そんな時、お母さんが「何か新しいことを始めて見たら？」の言葉で、私はハッとなった。中学校を楽しみにしていたのに、今の私は後ろ向きになっている。「前を見たい！」そう思い、どうしたらよいのか考えた。まずは、生活を見直すため、「朝早く起きて何か朝活をしよう！」そう決めた。それから、なるべく早く眠るようにして、朝は早く起き、学習時間にしている。そうすると、頭がスッキリして、夜よりも学習が進む。このリズムが定着してきた。

環境が変わる時、色々なことが変わり大変だと思うけれど、こうして意識をすることにより、体と心にゆとりができてくるのだと思う。そして前を向いて歩んでいきたいと思う。

### 1-③ 「こんなはずじゃなかった・・・」

「始め。」入学して初めての定期テスト。小学校のテストでは、たくさん勉強しなくても100点を取っていた。

中学校に入学して、1ヶ月がたった時、中間テストの範囲表が配られた。家に帰って、そのことを夕食の時に家族に話した。すると、お父さんとお母さんが、「テストでいい点を取ったら、行きたい場所にどこへでも連れて行ってあげる。」と言われた。姉と弟も応援してくれた。その期待に応えたい。それから。毎日テスト勉強に励んだ。

テスト当日。学校に着き、最終確認をし、テストが始まった。全てのテストが終わった。よくできた科目もあれば、思ったよりもできなかった科目があった。6時間目、理科のテストが返ってきた。あまり納得い

かない点数だった。中学校のテストは、小学校のように100点はなかなか取れず、「平均点は60点くらいになるように作られている」と先生が言っていた。平均点よりも上回っていた。だけど、その点数を目にすると、正直ショックだった。もっと頑張ればよかったと後悔した。

中学校では、今回のような1時間のテストが毎日のようにある。覚えないといけなことも、どんどん増えていく。だから、今のうちに復習と予習、テストのふり返りをきちんとして、中学校の「土台」をつくっていきたい。また、他の科目のテストの点数も受け止めたい。

## 1-④ 「小学校と違って・・・」

「部活動は～」 「授業の評価は～」 難しい話ばかり。私の中学校生活が始まった。分からないことだらけで、とても不安だった。

中学校と小学校の大きな違いは、まず部活動が始まることだ。運動部では、大会などに向けて、練習に取り組んでいる。休みの日も練習があつて、とても大変だ。文化部では、文化祭などに向けて準備を進めている。先輩、後輩関係なく仲が良くて、楽しく取り組んでいた。私の中学校では、部活動が少なかった。でも、それぞれの部活に特色があり、真剣に、でも楽しく行っている様子だった。入部して活動が始まると、さっそく総体に向けての準備をしていた。私は、文化部に入部した。文化部も大変だけど、3年間頑張れそうな予感がした。

次は、授業についてだ。評価は、5段階1～5、3段階A～Cとなっている。ノートや提出物でも評価がつく。また、授業のスピードも速くて、メモを取るのに必死になってしまう。さらに、定期テストもあって、勉強だけでも小学校と違うところがたくさんある。

このように、中学校は小学校と違うところがいっぱいあって大変だ。でも、中学校の次は高校。自分の進路を選ぶようになる。進路を少しでも広げていくために、決して「楽な方」には進まずに一生懸命努力したい。勉強や部活、習い事・・・とても大変だ。でも、どんなことにもあきらめず挑戦していける自分でいたいと思っている。

## 1-⑤ 「中学校はいいところだ」

「うわ～中学校ってこんなに楽しいんだ」と僕は思った。小学生の時、兄は中学生で、学校が嫌で行きたくないと言っていた。だから「中学校って色々と厳しくて、面倒なところなんだな。」と思っていた。

しかし、中学校に入学したら、そんなに大変ではないんじゃないかと思った。確かに宿題は多くて、授業が50分になり部活も始まり、家が学校から遠いので帰りが遅くなる。だから、兄の気持ちも分からなくもない。だけど、僕は中学校での生活が楽しい。授業の時間が増え、外でみんなと遊ぶ時間はなくなってしまったけれど、その分昼休みに先輩方と遊ぶ時や、部活動で先輩に技を教えてもらい、それを成功できた時は本当にうれしい。それに、好きな教科の時間ものびたり、担任の先生と色々なことを話したりもできる。中学校は、楽しいことやうれしいことの方が多い。僕にとって、毎日の生活が今はとても充実している。中学生になれて本当に良かったと思う。

学年が上がるに連れて、下級生のめんどろを見たり、学校全体をまわったりと大変なことも増えてくるかも知れない。だからこそ今は、毎日が楽しい中学校での生活をより充実させて、今の先輩方がしているように、笑顔で何事にも挑戦していきたい。そして、1年後くらいには、みんなに優しい上級生になっていきたいなと思った。「中学校はいいところだ」とみんなに言いたい。

## <中学校2年生> 作文課題「出会い」

## 2-①

### 「〇〇中のみんなとの出会い」

私の出会いは「〇〇中のみんなとの出会い」です。中学1年生の時や今年度、たくさんの人に出会いました。今回はそのことについて書きたいと思います。私は小規模校を卒業し、中学に入学しました。最初は、友達も少なくとても不安でした。自分から声をかけられず、休み時間も一人になることが多かったです。でも、班の女子と仲良くなることができました。それから、友達も増え、学校生活がとても楽しく過ごせています。友達(出会い)が増えたからこそ、たくさんのことを学び挑戦することができました。

部活動では、ソフトテニス部に入りました。初めての先輩達との出会いでした。1年生の入部は私一人で、少し不安もありましたが、先輩達はとても優しく私に接してくれました。もう友達のように、とても楽しく活動できています。2学年になり、クラス替えがありました。そこでも、話したことのない人と出会うことができました。今年度は、後輩も入ってきたので、これからもっと出会いがあると思うのでがんばりたいです。

私は、「出会い」とは大切なものだと思います。たくさんの人と出会い、たくさん学び挑戦し、中学生になり成長したと思います。これからも「出会い」を大切に、学校生活や日常の生活を過ごしていきたいと思っています。

## 2-②

### 「出会い」

中学入学式から今まで、たくさんの出会いをしていると思う。新しい友達や先生に出会ったり、おいしい食べ物や好きな物に出会ったり、中学入学から今までと短い日だが考えてみると、数え切れないくらいあったと思う。

特に印象に残った出会いが一つある。それは何かというと、部活である。私は今、バレーボール部に所属している。初めの頃は、何も分からない私に優しく先輩が教えてくれた。それから1年がたち2年生になった頃、顧問の先生が替わり新しい先生との出会いがあった。そして練習試合をした時、初めて会う学校の人達とも試合をした。強いチームとやる時、自分の苦手なプレーなどに気づけたり、仲間と力を合わせて分かったことがあったり、出会いを通してたくさんのことを学んだ。

出会いがあることで、良い経験ができたし、自分自身が成長できたこともあったと思う。約2年間このような経験をしたということは、これから先も必ず何かに出会い、良かったと思えると確信している。私は今、出会った人や物を失わないように、大切に一生懸命に後悔しないようにしていけるような人になりたいと私は思っている。

## 2-③

### 「推しネコ」

「行ってきます」「ただいま」。毎日とら吉にあいさつするのが、中学生の僕の日常だ。とら吉は捨てられていた五匹の赤ちゃん猫の一匹だ。あの雨の夜、あの場所であの時間に彼らと出会ったことが、今の日常をつくっている。僕にとっても周りの人達にとっても、かけがえのない愛しい存在だ。とら吉と出会ってから、あっという間に4年の時が流れた。喜怒哀楽のはっきりした性格や行動が分かりやすい猫に成長した。

遊び相手には僕が一番だ、と思うことがある。僕だけに後ろ足や前足を使って踏み踏みをしてくることだ。僕は、大きい猫の兄だと思っているのだろう。とても喜んでいるのが分かる。機嫌が悪い時は、好物のおやつを与えるとすぐ機嫌が良くなる。気分の切りかえの早さは見習いたくなるほどだ。学校でもとら吉を話題にしたり、似顔絵を書くせいか、友達がとら吉を見たいと家に遊びに来るようになった。今まで以上に友達の輪が広がり、仲良くなれたのはとら吉のおかげだ。ただ、とら吉は人見知りで内弁慶な

ので、友達が帰った後は、疲れてあからさまにフーとため息をつく。その時の表情や態度が何ともいえず面白い。僕が落ち込んでいる時は、寝ているぼくの頭の横で、静かに一緒に横たわってくれる。見守ってくれていると思うと、心が癒される。

とら吉に出会い、猫と遊ぶ楽しさや、辛い時や悲しい時助けられたことがたくさんある。とら吉はずっと兄弟だ。

## 2-④ 「大切な命」

私は命を抱きかかえた。私の心はドキリとした。今日からこの子と過ごしていくんだ。抱きかかえた時、大切に育てていこうと強く思った。

2023年3月頃、我が家に子犬がやってきた。まだ生後3ヶ月くらいしかたっていない豆柴だ。前から、父や妹が「犬を飼いたい。」と言っていた。そんな時に、母の知り合いが犬を譲ってくれると言ってくれたのだ。家族はとてもウキウキしていた。が、私は興味がなかった。どうでもいいと思っていたのだ。

そして、犬が家にやってくる日が来た。どんな子なんだろう、と少し気になった。そしてその子と対面した。その瞬間、私の心はドキリとした。その子の目に吸い込まれそうになった。とても可愛かった。その子を抱いてみた。温かかったが、少し震えていた。緊張しているのか、ずっと震えていた。早く安心させてあげたいと思った。私の妹が抱きかかえている時に、名前を決めることになった。私はその子にぴったりの名前を、インターネットで探した。そうしたら、一つだけ輝いているように見えた名前があった。「むぎ」だった。私はそれをみんなに提案し、案が通った。私は改めて「むぎ」を大切にしようと思った。

「むぎ」という存在に出会って、私の人生は一変した。前よりも確実に楽しい生活を送れている。私はこれからも、愛犬「むぎ」と一緒に楽しく過ごしていこうと思う。

## 2-⑤ 「言葉との出会い」

「頼まれごととは試されごと」この言葉は、2年生に進級した私達に、担任の先生が言ってくれた言葉だ。中学2年生になりたての私は、この言葉と出会った。日々の中で様々な言葉と出会い、元気を出してもらったり、勇気をもらったり、考えさせられたり、時には傷つけられたりしている。出会った言葉から受ける影響はとても大きい。

言葉との出会いは様々な。それは、誰かとの会話の中だったり、歌の歌詞だったり、本の中だったり、テレビドラマのセリフだったり、マンガの中だったり……。この世はたくさんの言葉であふれている。そのたくさんの言葉の中で、自分が「出会った」と思えるものは、なるほどと深く納得したり、とても感動したり、いつも自分の心の中であって、背中を押してくれるものだったりする。逆に傷つけられた言葉や、汚い言葉も忘れられずに、出会ってしまったということになる。日常に当たり前に存在している言葉だからこそ、出会ったたくさんの言葉たちを大切にしなければならない。

ふわふわ言葉とちくちく言葉。小学校1年生の時の道徳で学習したことを覚えている。小学校1年生になり、ふわふわ言葉をたくさん使いたいな、ふわふわ言葉をたくさん言ってもらいたいな、と思った。その思いは「言葉との出会い」の基本で、これからも一つひとつの言葉を持つ意味を考えながら、たくさんの言葉と出会いたい。

## <中学校3年生> 作文課題

「川勝前知事の発言をどう感じ、どのようなことを考えたか」

### 3-① 「川勝知事の発言をどう感じ、どのようなことを考えたか」

6月の静岡県議会をもって辞職する川勝平太知事の4月1日の発言を初めて聞いた時、「これは間違いなく問題発言だ」と感じました。この発言に対し、ニュースを見たりして感じた川勝知事に直して欲しい点について、2つ話そうと思います。

1つ目は、「感謝」です。これは、今回問題になった発言にもあてはまるものです。例えば、日本には食事の前後に「いただきます」「ごちそうさま」と言う文化がありますが、これは生産者に対して、また生き物の命をいただくということに感謝をするもので、知事はこの行為でそういうことを考えたことが少ない、もしくはないのでしょうか。また、身の回りにある家具なども、人の手で作られたものですが、その人達や他の職種の人達を下に見ていて、差別的にも見えました。知事には、生活が当然にあると思わず、支えてくれる人々に感謝して欲しいです。

2つ目は、「偏見」です。今回もそうですが、以前にも「御殿場にはコシヒカリしかない」「男の子はお母さんに育てられる」などと、偏見と取れる発言をくり返していたそうです。自分の言葉を聞いた人達がどう感じるか、深く考えて発言して欲しかったです。

公式には、反省の意見が述べられていて、それが本当かは分かりませんが、県をまとめる立場として、良くないことが多かったので、口だけでなく心から深く反省して欲しいと感じました。

### 3-② 「人と接する上で」

私は、父に教えてもらい、川勝知事の発言を知った。「県庁というのは、別の言葉でシンクタンクです。毎日、野菜を売ったり牛の世話をしたり、物を作ったりとかと違って、基本的に皆さんは頭脳・知性の高い人達です。」と、県庁の新人職員に発言した。この発言は、農家や職人などを侮辱しているのではないかな。川勝知事が普段食事したり、物を買って使ったりできるのは、誰のおかげなのかと聞きたい。

調べてみると、他にも問題になるような発言をしていると知った。「あちら(御殿場)にはコシヒカリしかない」「磐田は文化が高い。浜松より元もと高かった。」などだ。先ほどの発言と同じく、誰かを下に行っていることが多い。あくまで私の意見だが、知事は自分は正しいと思っている。だから問題になるような発言をしても、反省せず撤回しない。

私は生徒会副会長をしている。これから先、自分の意見を話す場が増える。その時は、相手が傷つかないか、誤解を生むような伝え方になっていないかを考えながら、話すことが大切だと思う。誰かの心を傷つけてしまったら、その傷は心のどこかに残り続ける。私の軽い言葉で、誰かの心に直らない傷を作ってしまうことはしたくない。知事の発言の件で、人と接する上で大切なことを確認し直せた気がする。

### 3-③ 「人として相手を考えて」

川勝平太知事は、会見や演説の中で失言をくり返してきた。中でも「職業差別発言」をしたことが世間に広まり、県庁に苦情や批判の電話が殺到した。発言をした本人は、後の会見で「差別の意は皆無」と主張したが、その後辞職を表明した。

この発言は、あまりにも失礼だと思った。新人職員達に、頑張って仕事に取り組んでももらいたい気持ちはよく分かる。しかし、農家や職人のことを軽蔑して、「自分たちは優秀な人間だ」とモチベーションを上げさせることは、間違っている。県の政治を取り仕切るとは大切な仕事だが、野菜を育てて売ったり、物を作ったりすることも大切な仕事だ。その仕事をする人がいるから、日々の生活が成り立っている。そのことを実感していないから、あんな発言ができたのだろう。また、彼は相手の気持ちを全く考えずに発言をしている。発言に当てはまる人々がその言葉を聞いたら、どれほど傷つくか全く考えていない。県知

事としてはもちろん、人としてあるまじき発言だ。

今回の発言を受け、私は一言一言考えて発言するようにしたいと思った。自分にとっては何気ない言葉のつもりでも、聞いた相手の捉え方によっては傷つけてしまうこともある。だから、相手に声をかける時は、よく考えてから発言したい。

### 3-④ 「気づけた大切さ」

川勝知事の発言を、この作文課題が届くまで知りませんでした。スマホで調べると、職業をバカにするような発言をしていました。私のおじいちゃんおばあちゃんは、毎日畑で野菜を育てています。そんな身近に畑仕事をしている人がいるのに、この発言はショックで仕方ありませんでした。

毎朝、鍵を預けに隣のおじいちゃんの家に行きます。しかし、家には誰もいません。そのことを不思議に思い、後日聞いてみると、朝8時前から友人の畑の手伝いに行っているそうです。毎日毎日、一生懸命働き、時には高い脚立から落ち、ドクターヘリで運ばれたこともありました。私はそれから心の中では、行って欲しくない気持ちで一杯でした。農業、酪農などは、決して知性の低い仕事・頭脳のない仕事ではありません。野菜を育ててくれる、動物の世話をしてくれる人がいなければ、私達が日々食べている物は食べられなくなります。そんなことをしっかり理解し、考え、頭を使ってから発言をして欲しいです。

政治に関係していない方達も同じです。その一時の感情でムツとなり、感情的になるのではなく、聞いている人が不快にならないような発言を、全員が心がけると良いと思います。「言葉というものは、一度口に出したら、元には戻せません。使い方を間違えると、ナイフよりも鋭い凶器になります。」この言葉を常に心にしまい、日々過ごしていきたいです。

### 3-⑤ 「言葉から伝わる思い」

人を見下す人や、自分の非を認めない人には、絶対になりたくない。そう感じたのは、川勝平太知事の言動を耳にしたからである。

4月1日、静岡県の川勝知事は、新人職員の訓示の中で、「県庁というのは、別の言葉で言うとシンクタンクです。毎日、野菜を売ったり牛の世話をしたり、物を作ったりとかと違って、基本的に皆さんは頭脳・知性の高い方たちです。」と発言した。この発言は、私にとっては職業差別をして、見下しているようにしか思えなかった。まるで、商業や工業をしている方々は、頭脳や知性が高くないといっているようなものだと思った。それは彼らに対して、失礼極まりないものだと感じ、心の底から怒りがこみ上げてきた。さらに翌日、昨日自身が発した言葉について、「問題発言があったかのごとき状況となって、本当に驚いている」「不愉快な思いをされたということであれば、誠に申し訳ない」などと述べた。この、反省の意が全く感じられない発言を聞き、更に腹が立った。素直に謝罪すればいいものを、自分の非を認めないのは、人としてすべき行動ではないと思う。

今回の川勝知事の発言から、職業を差別したり、自分の非を認めない自信過剰な人には、絶対になりたくない。私は少しでも誰かの役に立てるような、良い人間でありたい。